

共同体〈心体知〉の経年的変化に関する分析  
 ～相互行為データと当事者の内省的叙述を手がかりに～  
 An analysis of chronological change  
 in community's knowledge, skill, and *ethos*:  
 Using interactional data and participant's self-description

榎本 美香<sup>†</sup> 伝 康晴<sup>‡</sup>

Mika Enomoto Yasuharu Den

<sup>†</sup> 東京工科大学メディア学部 <sup>‡</sup> 千葉大学文学部

School of Media Science, Tokyo University of Technology Faculty of Letters, Chiba University

menomoto@stf.teu.ac.jp

## Abstract

In this study, we report on some results from our fieldwork at Nozawa Onsen. We show how participants preparing for a festival acquire the community's knowledge, skill, and *ethos* in the course of relevant activities. These include the knowledge about the names and usages of equipments for the festival, the body arrangement and the force allocation among the participants when working together, and the shared values and concerns of the community. We analyzed the interactional data obtained from 3-year recordings of the participants' activities as well as self-description of a key participant on his attitude toward the community. We found that by contrast to apprentices, who are not skillful at working together, proficient can effectively coordinate with one another depending on the situation, suggesting that they have acquired the community's knowledge, skill, and *ethos*, which are crucial for participating in joint activities.

**Keywords** — knowledge, skill, *ethos*, community, situated cognition

## 1. はじめに

### 1.1 本研究のフィールド

本研究がフィールドとするのは、長野県下高井郡野沢温泉村に伝わる道祖神祭りを執り行う「三夜講」と呼ばれる集団の活動である。三夜講は、数え歳で42歳に連なる3つの年齢層の男性たちが3年間参加する共同体である。たとえば、2010年度に数え歳42歳、41歳、40歳で編成された三夜講は、この3世代で2012年度までの3年間この祭りの準備に携わる。道祖神祭りは毎年1月15日に行われ、42歳になる世代が「世

話人」として祭りの主たる実行部隊となる。世話人であるメンバーは毎年入れ替わるが、世話人を終えた者も後見人として、41歳以下の者も見習いとして、全員が都合3年間祭りの支度に関わる。祭りは毎年行われるが、3年で1つの完成をみると言われている。先の例でいえば、2010年度が初の取り組みであり、2011年度を経て、2012年度にその3年間の集大成となるわけである。

我々が初めて三夜講と出会ったのは、2012年10月6日の「御神木伐採」という行事の前日であった。自然発生的な会話の収録を求めていた筆者らは、野澤組惣代の助言のもと、この日から祭りの準備作業を見せてもらうことになった。ただし、前段のような知識は何もない。村中に道祖神祭りのポスターは貼られているし、宿のご亭主も惣代さんもこの祭りが重要無形民俗文化財に指定されていることを誇らかに教えてくれるものの、厄年の男性がやるという以外には何もわからない。御神木伐採に関わる事前の寄り合いのようなものに参加できないかと惣代さんに訊ねたところ、前日に「横落婦人の家」でそのようなものを行う、10月6日の朝7時半か8時ぐらいにそこに行けば皆集まってくるからということであった。

寄り合いかと思って待っている我々の前に、ツナギを来た男性たちがヘルメットやチェーンソーなどを携えて集まってくる(図1)。8時になると全員整列し、代表者らしき男性が「本日は山などありますので、くれぐれも怪我のないようお願いします」とごくごく簡潔な挨拶を行う。直後に解散となり、数人ごとの小グループに分かれた彼らは軽トラに乗って散り散りに去っていく。「寄り合い」ではないらしい。約1年後にこの日のスケジュールを入手したものが図2である。湯の峰・池の沢、惣代倉庫、桁割場などというのが場所の名で、「ぼや受け入れ準備」「桁養生場準備」とい



図1 2012年10月6日7時45分「横落婦人の家」前

うのが作業名である。図の最左にある「総括」「副総括」「道祖神委員長」「副道祖神委員長」などというのが各役職名で、42歳世話人である「郷愛会」列、41歳見習いである「寶友会」列にそれぞれ担当者の名前が入っている（プライバシー保護のため黒塗りで消してある）。この時軽トラで散っていった人々は、それぞれ道祖神委員長や副道祖神委員長の世話人と見習いの役職ごとのグループだった。ようよう桁割場や道祖神場にカメラを構えた我々は2人での杭打ちや9人でのテント組み立てなどの共同作業が撮れたと喜ぶ。午後には湯の峰での桁材伐採・玉切りを見せていただく。これは副委員長の世話人と見習い2人とその後見人2人、彼らに木材の見立てをする山棟梁を筆頭とする保存会の3人と顧問1人、職人（木樵り）2人、伐った木を帳付けする2人、道具係の2名と総勢11名が一隊として道なき山中を動き回る壮絶なインタラクションであった。伐採後山を下りながら、我々は以下のように話している<sup>1</sup>。

【断片1】  
 細馬： そやけどなんか終わる時に「はい上がるぞ！」とかそういうのないんやね  
 榎本： ないんですね  
 細馬： なんかすーっと終わるんや  
 榎本： みんなあの次の仕事に入るタイミングが全員一致しててばあーと変わるんですよ  
 細馬： うん  
 榎本： あれがすごい不思議なんですけど、たぶん下の人が上の人をめっちゃ見てるからそのタイミングで動いてるんでしょうねえ  
 細馬： そうなんやな  
 細馬： なんかいわゆる学校のさ教員対学生の感覚とぜんぜん違うんやな  
 榎本： 違いますね  
 榎本： なんか全員がものすごいすーっと同じ一つの活動に従事してるって感じがします

この時我々が感じた「学校の教員と学生の感覚とは違う上下の関係性」や「全員がすーっとばあーとすーっと同じ活動に従事している様」が何であったのかを解

<sup>1</sup> この時の撮影には、著者たち2人以外に細馬宏通氏（滋賀県立大）が参加していた。

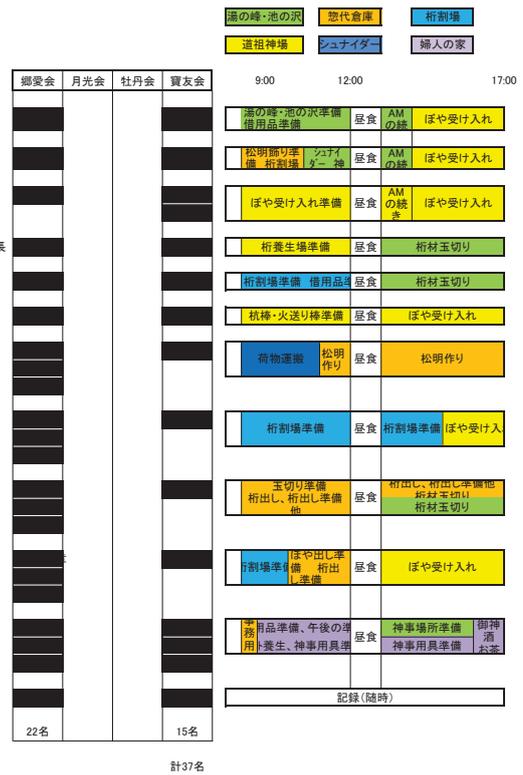


図2 2012年10月6日 スケジュール

き明かすことが本研究の目的である。

### 1.2 共同体〈心体知〉のモデル

世話人と見習いは1歳違いであるが、そこには非常に封建的な上下関係が求められる。特に同じ役職の世話人と見習いは互いに「あんちゃ（兄の意）」「おっさ（弟の意）」と呼び合い、作業中は常に行動を共にし、おっさはあんちゃを手伝う中で祭りの作法や祭具に関する知識や操作方法を憶えていく。「おっさらに背中教えて手出しなんかさせねえように」「頭で考えんじゃなくて手で覚えろ」と言われ、様々な知識や技術が言葉ではなく実践の中で伝えられていく。認知科学の分野に引きつけて述べるならば、熟達者が初心者に手本を示し、実際にやらせてみて見守り、問題があれば手助けするといった「認知的徒弟制」[1]がまさに生じているのである。見習いたちは世話人たちが威信をかけて行う祭り支度の本番に観察者であり初心者であることが許される「正統的周辺参加」[2]を行うことで、知識や技術ばかりでなく熟達者が何を大切に、喜び、嫌い、感嘆するかなど実践のエッセンスを学んでいくのである。生田[4]は日本芸能の伝承において、師匠と弟子が生活をともにすることで「わざ」に固有の呼吸のリズムが感得されると指摘しているが、先輩



図3 徒弟制の学習モデル

集団の傍らに参加することで「三夜講」独自の精神世界を体得すると考えられる。

Lave [3] の仕立屋の弟子の例では、まずはボタン付けやアイロンがけ、次に縫製、最後に裁断と製造ステップを逆順にたどることによって失敗を少なく、しかも衣服構成が理解できるようになっているという。また、Lave & Wenger [2] に出てくる産婆の家系の少女はたんなる成長過程の中で、母親や祖母が日中であろうと夜中であろうと出かけなければならないこと、女や男がやってきてする相談の内容、薬草や治療薬の買い物など産婆術の実践のエッセンスを吸収していくという。大浦 [5] が紹介する Zuckerman (1977) のインタビューも興味深い。ノーベル賞受賞者 92 名が指導者から何を学んだかについて、何よりも大きな収穫は指導教官の優れた眼力（判断力や問題発見能力）、考えの進め方、研究に対する態度や評価基準の厳しさに触れたことだと異口同音に述べるという。これらの事例は弟子が学ぶべきことは個々の知識や技術だけでなく、それを支える態度でもあることを示している。ただし、これらの研究は熟達者個人がもつ知識や技術や実践のエッセンスを初心者がどう引き継いでいくかという個人「内」の学習を扱うものである。極端に表すなら図3のように、空である初心者が熟達者の状態へ移行するという1対1のモデルである。

これに対し、本研究が対象とするフィールドは山での伐採・玉切りの例にあるように、多様な役職の者たちが多数入り乱れる相互作用の場であり、世話人どうしのやりとりを観察したりそれに参加したりすることも、見習いどうしのやりとりからあるべきやり方を見出すという多対多の学習モデルが必要になる。そこで、本研究では成員個々人がもつ知識・技法・態度のうち、他の成員と共有する部分を共同体〈心体知〉と名付け、見習い世代が仲間内や世話人世代と多対多の相互作用からこれを経年的に学習していく過程を明らかにする（図4）。共同体〈心体知〉とは具体的に以下を指す。

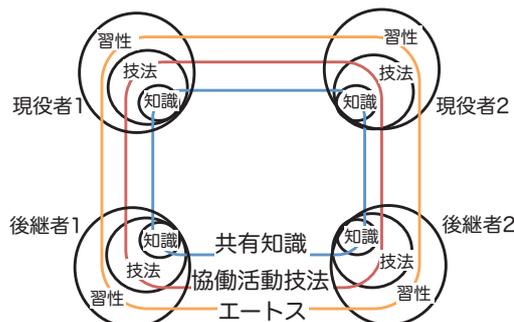


図4 共同体〈心体知〉のモデル図

心: 成員たちがもつ価値観や見識、信頼感といった  
エートス (e.g. 他者への気配り、自己犠牲の精神)  
体: 成員間で力や身体位置の配分が必要な協働活動  
技法 (e.g. 唄のリズムと木や縄の操作との同調)  
知: 祭具の名称や用法、祭りのしきたりといった共  
有知識 (e.g. 社殿各部位の木材や縄結びの呼称)  
本研究では、祭りの支度を共に行うことでこの共同  
体〈心体知〉を見習いたちが教え導かれるだけでなく、  
仲間内での相互作用からも獲得・共有・強化していく  
ことを実際の経年的データから詳らかにする。

## 2. 分析資料

### 2.1 収録場所

長野県下高井郡野沢温泉村

### 2.2 収録対象

野沢温泉で1月に行われる道祖神祭りの支度を担う「三夜講」という数え42歳につらなる3世代の集団の相互作用を収録対象とする。三夜講内では、毎年42歳30名弱の集団が祭りの中心的な執行を担う「世話人」となり、それより年下の集団は「見習い」として世話人を手伝う。また、世話人を終えた年上の集団は主だった行事のみ「後見人」として世話人を補佐する。図5にこの模式図を示す。例えば、現「三夜講」は2013年度に42歳をむかえた寶友会を筆頭に、その時41歳であった成翔会、40歳であった焔心会から編成されている。2013年度は寶友会が世話人、成翔会・焔心会は見習いとして参加する。2014年度には、成翔会が世話人となり、焔心会は見習い、寶友会は後見人として参加する。2015年度には、焔心会が世話人となり、寶友会・成翔会は後見人として参加する。また、次期「三夜講」の最年長グループである励翔会が引き継ぎのため見習いとして参加する。同様の仕組みで、

表 1 道祖神祭りの支度場面の収録内容と既収録時間

行事名	活動内容	時期	既収録時間	既収録年度
シート洗い	ブルーシートの掃除	6月上旬	8時間×2年分	2014, 2015年度
御神木伐採	道祖神木像の伐採	7月中旬	8時間×2年分	2014, 2015年度
ぼや出し	社殿材料の収集	9月下旬	8時間×2年分	2013, 2014年度
○御神木伐採	社殿材料の木材伐採	10月中旬	28時間×3年分	2012, 2013, 2014年度
○御神木里引き	御神木運搬等	1月13日	8時間×3年分	2012, 2013, 2014年度
○社殿組み	社殿造営等	1月14日	20時間×3年分	2012, 2013, 2014年度
○道祖神祭り	上棟式・祭り	1月15日	14時間×3年分	2012, 2013, 2014年度
シート片付け	道祖神場のブルーシート上げ	4月上旬	8時間×1年分	2014年度

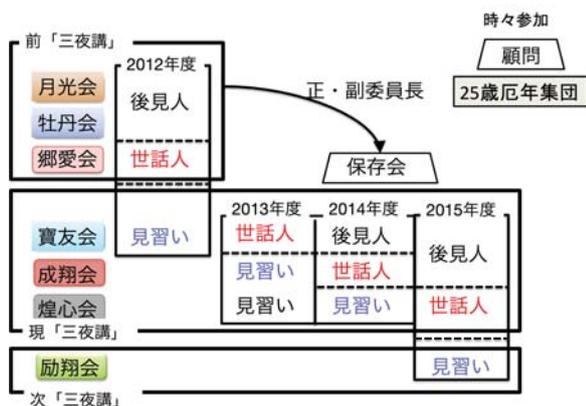


図 5 「三夜講」 模式図

2012年度、前「三夜講」の最終年度に寶友会が見習いとして参加していた。

また前「三夜講」各集団の代表者2名(道祖神委員長・副委員長)の6名は保存会として現「三夜講」の指導にあたる。これに加え、総元締めである野澤組から顧問という役職の者が数名、社殿造営の指導に加わる。25歳厄年の男性も、主たる行事には参加する。

## 2.3 収録方法

筆者らを含む、総勢9名<sup>2</sup>がそれぞれデジタルビデオカメラを手持ちで対象を追いながら撮影。同一場面を別アングルから撮影する場合は最初に手拍子を入れ、収録後その音声情報から同期する。

## 2.4 収録内容

収録対象である行事名(主たる行事には○を付与)と既収録時間を表1に示す。

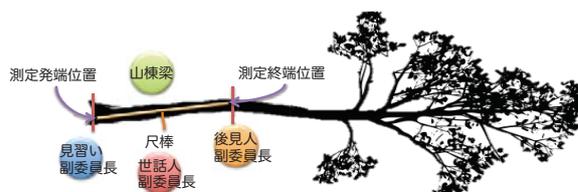


図 6 玉切りの第1段階

## 3. 分析：玉切り場面の経年的変化

### 3.1 玉切り模範例

まずは伐採後の玉切りの模範例から見ていこう。玉切りとは、伐倒された木を用途に応じた寸法に切断し素材丸太にすることである。

社殿作りのための素材としては主に6尺、9尺、12尺、15尺、24尺といったサイズの違う桁と垂木になる丸太を作る。職人によって木が伐り倒されると、長さ15尺の尺棒<sup>3</sup>を木にあてがい、直線で取れる最長の長さが必要素材との兼ね合いから切断位置を決めて、そこを職人が裁断していく。この尺棒という道具が面白い。15尺(約4.5m)もあるため測定には少なくとも、両端に人が2人必要になる。図6に模式図を示すが、まず根元から尺棒をあてがい、丸太1本ずつを山棟梁と副委員長らで測定・決定・記入していくことになる。まず山棟梁がどの素材にするかを決定すると、副委員長らが「6ケタ」「9タル」など長さや用途名を組み合わせた名称を記入する。そして、次の測定位置に尺棒を移動させ、同様のことを行う。枝先も杭や火送り<sup>4</sup>など様々な用途の素材となる。この時の山棟梁と副委員長らの見事な連携プレイが、2012年度の収録データから抜粋した図7の断片2である。

2012年度は図5に示した前「三夜講」最後の年であり、2年の見習い期間を経た郷愛会が世話人となっている。月光会は2年目の後見人であり、またこれを指導する山棟梁ら保存会も3年目である。山での伐採・

<sup>2</sup> 行事の大きさに応じて収録人数を調整している。

<sup>3</sup> 1尺おきに刻みを入れた角棒

<sup>4</sup> 祭りの時に火種を社殿に近づけるために使用する長い棒

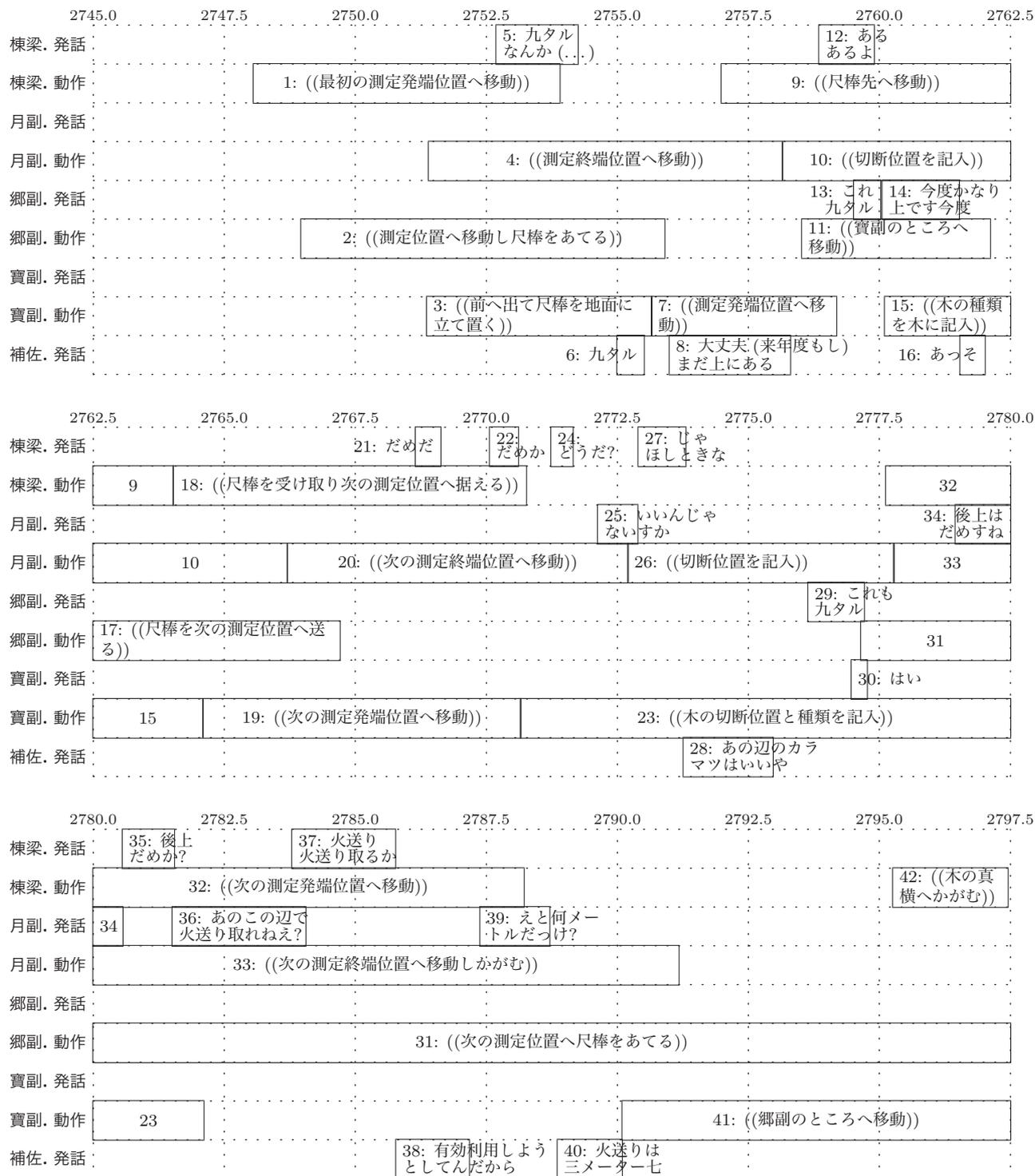


図 7 断片 2: 玉切りの模範例 (棟梁=山棟梁、月副=月光会副委員長、郷副=郷愛会副委員長、實副=實友会副委員長、補佐=補佐さん)

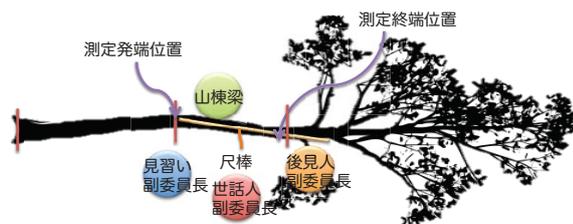


図8 玉切りの第2段階

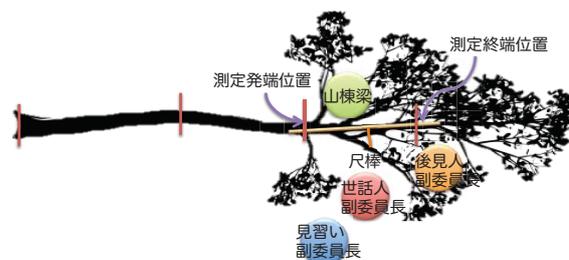


図9 玉切りの第3段階

玉切りは副委員長の持ち場であり、郷愛会の副委員長が主たる執行者となる。これに今年度から初めて参加する次の三夜講最年長組である寶友会の副委員長が見習いとして加わっている。

木が地面に倒れて跳ね返る中、山棟梁（棟梁）が根本付近の測定発端位置へ動き始める（1）。ほぼ同時に世話人である郷愛会副委員長（郷副）が尺棒を持って木に近づき、根本に尺棒の片側をあてる（2）。尺棒をあて終わる寸前に補佐さんが「九タル」と言う（6）。この部位は9尺の垂木とする、という意味である。見習いの寶友会副委員長（寶副）が自分の持っていた尺棒を置いて（3）、測定発端位置へ近づいてくると（7）、郷愛副委員長はそちらへ向かい、「これ九タル」と記入すべき名称を告げる（13）。直接郷愛副委員長に9タルにせよという指示はなかったが、先ほどの補佐さんの発言を受けてのものと考えられる。すると、寶友副委員長がこれを木に記入する（15）<sup>5</sup>。この間、後見人である月光会副委員長（月副）<sup>6</sup>は測定終端位置へ移動し（4）、切断箇所を記入している（10）。

月光副委員長の記入が終わるのを見計らい、郷愛副委員長は次の測定位置へ尺棒を送ると（17）、山棟梁がこれを受け取って木に据える（18）。図8の配置になる。この間にすばやく測定終端位置へ移動している月光副委員長（20）に向かい、「だめだ」（21）「だめか」（22）「どうだ」（24）と目的の素材が取れるか確認し、「いいんじゃないですか」という応答が返ってくると（25）、「じゃほしときな（「ではそうしておきな」の意）」と言う（27）。このやりとりが終わるとすぐに、郷愛副委員長は測定発端位置へ切断位置を記入している寶友副委員長（23）に「これも九タル」と告げ（29）、次の瞬間には尺棒を次の測定位置へあてに行く（31）。

郷愛副委員長が尺棒を移動させると同時に山棟梁は測定発端位置（32）、月光副委員長は測定終端位置へ移動（33）しており（図9）、月光副委員長が「後上はだ

めですね」（34）と枝先部分からはもう素材が取れないと言うが、月光副委員長は「あのこの辺で火送り取れねえ?」と代案を出し（36）、山棟梁も「火送り火送り取るか」（37）と同意する。補佐さんも「有効利用しようとしてんだから」（38）駄目と言って簡単に打ち捨てないようアドバイスする。月光副委員長が火送りは「えと何メートルだっけ?」とつぶやくと（39）、「火送りは三メートル七」と補佐さんが教える（40）。これで枝先が火送りになることが決まるとみるや、職人がチェーンソーを始動させ不要な小枝を払い始める。

この一連の図6、8、9と進む活動において最も知識を必要とするのは何尺の垂木や桁がそこから取れるかを決定することであろう。この部分を山棟梁とその見習いである月光副委員長が受け持っており、さらに補佐さん<sup>7</sup>が逐次アドバイスもしている。しかしこの二人が息のあった調子で次々と木の種類をさしたる議論をすることもなく決定していくのにあわせて、郷愛副委員長<sup>8</sup>は、尺棒を次々と測定位置へ移動させ、山棟梁らの会話から素材の種類を判別して見習い副委員長にそれを記入するよう指示も出している。郷愛副委員長は山棟梁らの焦点の先を読みながら、山棟梁たちしか持っていない知識を使う箇所以外の作業をこなしているのである。この役割の者がいるからこそ全体の作業が円滑に進んでいるとも言える。この活動中もっとも簡単なのは、測定発端位置に切断位置を記入することである。尺棒が木に据え置かれた瞬間に尺棒の端が切断位置になるからである。これを初参加の寶友副委員長が行っており、山棟梁らの会話だけからは判定が難しい木の種類については、決定すると即座に郷愛副委員長が教えにきてくれるのである。現在の測定状況に応じて全員がそれぞれになすべき役割をこなしており、根本から枝先まですーっと流れるように人々が動いていく。木が倒れてから、約1分で測定が終了している。

<sup>5</sup> 記入には墨付けマーカーというザラザラした木目に記入できる油性ペンが使われる。

<sup>6</sup> この後見人副委員長は現三夜講最年長集団の副委員長であり、翌年の三夜講の入れ替え後には山棟梁になる。この場面では、山棟梁見習いとして、現山棟梁を手伝っている。

<sup>7</sup> こういった作業を永年サポートする立場の人が野澤組には数人いる。

<sup>8</sup> 彼も翌年から保存会となり山棟梁を補助する役職にある。

### 3.2 初めての玉切り

3.1のように各役職の者たちの見事な連携がみられるような玉切りが三夜講初年度からできるわけではない。翌年の三夜講の入れ替え後最初の伐採・玉切り場面を見てみよう。図5の2013年度の欄である。寶友会が世話人、下に見習いの成翔会と焯心会が入ってきている。月光副委員長は山棟梁となり、牡丹副委員長、郷愛副委員長も保存会になり伐採に付き添う。これからみる2013年9月29日は、本来「ぼや出し」<sup>9</sup>という行事の日であるが、ぼや出しが午前中に終わってしまったので、午後の空き時間に桁材等の伐採と玉切りを急遽行うことになった。見習いとして参加している成翔会にとっては初めての伐採・玉切り作業になる。

図10に示す断片3はかかき木<sup>10</sup>を縄で引いて倒した直後である。山棟梁(棟梁)が木に尺棒をあてに行くも(1)、すぐには誰も動かない。3.24秒後に世話人である寶友会副委員長(寶副)が尺棒をあてた先の測定終端位置へ移動を開始し(3)、切断位置を記入する(5)。見習いである成翔会の副委員長(成副)は寶友副委員長の方へ歩みよるも(2)、その後ろで立って見ているだけである。山棟梁は「これで十三(長さで余裕をみて13尺になるという意か?)」と言いながら(6)、自ら墨入れマーカーを取り出して(7)、測定発端位置に切断箇所を記入する(8)。

記入が終わると尺棒を持ち上げて次の測定位置へ尺棒をあてに行く(13)。測定終端位置を記入し終えてただ立っていた寶友副委員長は山棟梁が通過するのを除けている(15)。山棟梁が定点へ尺棒をあてて押さえて(16)、ようやく寶友副委員長は測定終端位置へ移動する(17)。前の測定発端位置に木の種類を記入していた成翔副委員長(14)は、山棟梁が尺棒を固定させると測定発端位置の切断箇所を記入しに行っている(18)。

この作業が終わると山棟梁は「後丸太と枕ん棒お前から欲しいだけ取って:」と言い(22)、寶友副委員長に尺棒を渡す(25)。寶友副委員長が尺棒を木にあてると(28)、成翔副委員長は測定発端位置に切断箇所を記入し(29)、測定終端位置へ移動する(33)。寶友副委員長は「両方マクラ」(37)と枕木にすることを決め、「勇人<sup>11</sup>ここ書いとけここ」(38)と指示しながら自分でマーカーを受け取って(39)記入する(41)。寶友副委員長が次の測定位置へ尺棒を持って移動すると(43)、成翔副委員長も同じ位置に何かを記入する(44)。

<sup>9</sup> 「ぼや」とは社殿の上に乗せる小枝を束にした素材を指し、これを600東ほど近隣の山から採取して、道祖神場に搬入する作業を「ぼや出し」という。

<sup>10</sup> 伐採した木が隣の木にひっかかって倒れない状態にあること

<sup>11</sup> 成翔会副委員長の名前(仮名)

寶友副委員長が次の測定位置へ尺棒を据える時(45)、成翔副委員長は測定が終わったかのごとく木の根元の方へ戻る(46)。寶友副委員長は尺棒の上に屈んだ姿勢で成翔副委員長を目で探し(47)、「勇人」と呼ぶ(48)。呼ばれて戻ってきた成翔副委員長(49)はまた木への記入を開始する(50)。

前年度の断片2に見られたような組織だった連携プレイはあまり見られず、山棟梁が単独で尺棒を操作している。山棟梁とともに皆が一斉に動くのではなく、世話人である寶友副委員長も少し出遅れてたり(3)、棟梁を避けたりしている(15)。この寶友副委員長は前年度見習いとして、前「三夜講」最後の玉切りに参加しているが、その時は世話人であった郷愛副委員長が適宜指示を出してくれていた。ただし、前年度(図7)の木が倒れてから木に近づくまでなど、寶友副委員長(3)に着目してみると、山棟梁(1)や郷愛副委員長(2)に出遅れている。世話人になったこの年もまだ山棟梁の動きにはついていけないと考えられる。逆に、山棟梁の方も保存会初の仕事であり、前年度まで三夜講として自分らで尺棒を操作してきたその延長線上から抜けきっておらず<sup>12</sup>、実質的な操作を三夜講に任せるといふ参与の仕方に至っていないとも言える。さらに、玉切り初心者の成翔副委員長は測定途中で引き返すなど(46)、寶友副委員長から注意を受けており(48)、全体の活動進行において自身が何をすべきかが今いち把握できていない。4箇所の測定をするのに2分以上かかっている。

### 3.3 2年目の玉切り

図5の2014年度の年、山棟梁らも2年目の伐採・玉切りである(図11の断片4)。成翔会が世話人、焯心会が見習いとなる。焯心会はこの玉切り作業には初めての参加となるが、前年度から他の主だった作業では見習い修行をしており、見習いという立場としては2年目である。

木が倒れるとほぼ同時に山棟梁(棟梁)が尺棒をもって測定位置へ移動を開始し(2)、成翔会副委員長(成副)(1)、焯心会副委員長(焯副)もほぼ同時に移動を開始している(3)。成翔副委員長が測定発端位置へ移動(1)したのを見て、焯心副委員長は測定終端位置へ移動している(3)。

焯心副委員長が何を記入しているかわからず山棟梁を見ると(5)、山棟梁は切断終端位置を指さし(6)、「さんじつぽ」(7)と言っている。チェーンソーの音が

<sup>12</sup> 彼は前年度(図7)の月光副委員長である。

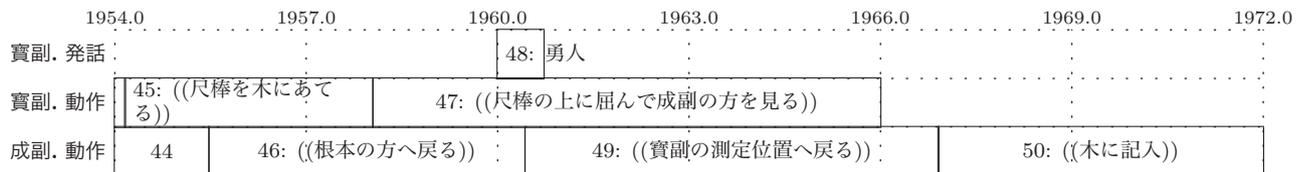
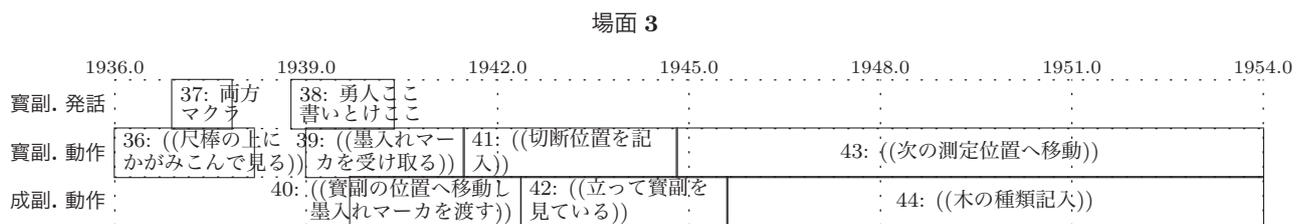


図 10 断片 3 (棟梁=山棟梁、實副=實友会副委員長、成副=成翔会副委員長=勇人)

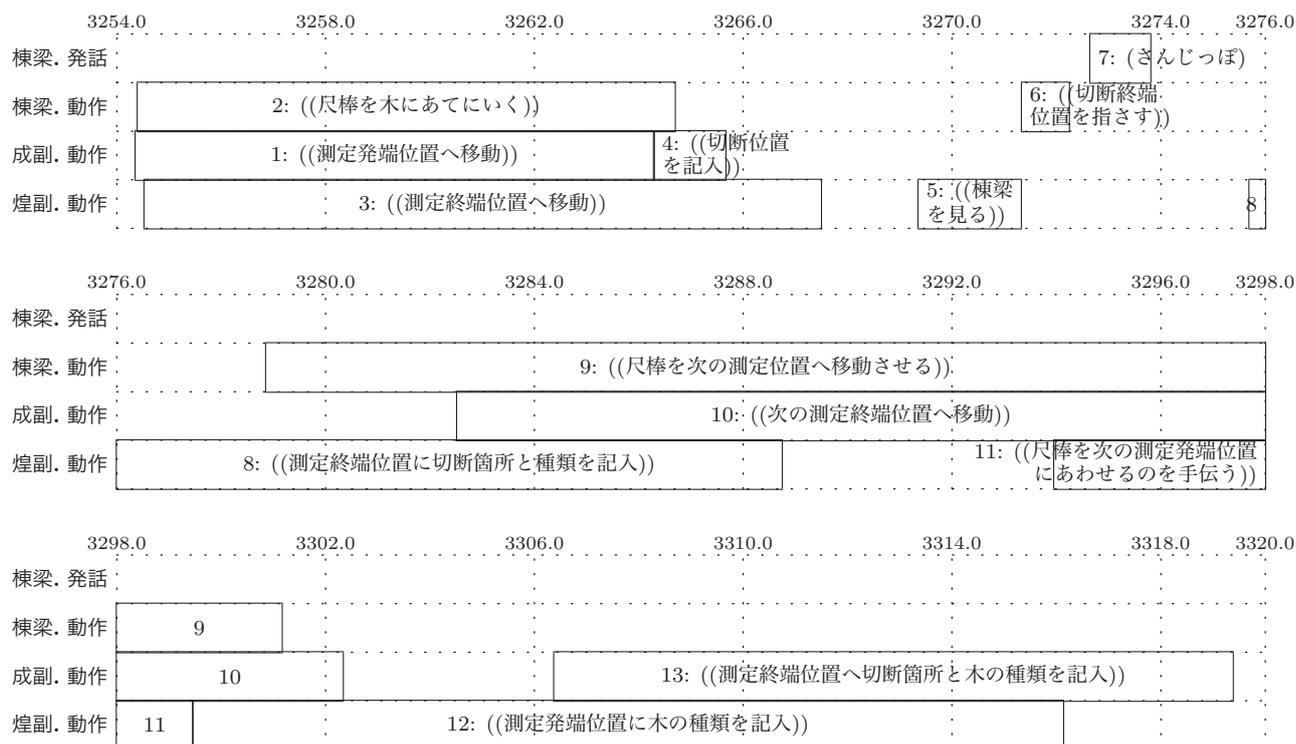


図 11 断片 4 (棟梁=山棟梁、成副=成翔会副委員長、煌副=煌心会副委員長)

響いているため何と言っているのか正確には聞き取れないが、木の種類を指示したものと思われる。煌心副委員長は記入を開始する (8)。

次の測定位置へ山棟梁が尺棒をもって移動すると (9)、成翔副委員長もこれにつれて動き今度は測定終端位置へ配置につく (10)。煌心副委員長は記入を終えて、山棟梁が尺棒をあてがう端を持って、測定発端位置にあわせるのを手伝っている (11)。

山棟梁が尺棒を操作している点は初年度と変わらないが、山棟梁の動きと連動して世話人・見習いの副委員長が動き、測定を一緒に行っている。煌心副委員長はこの時が初めての玉切りであったはずであるが、成翔副委員長が見習いであった時からもう一つ下の見習いとして社殿作りには参加しており、またこの年のぼや出し行事にも見習いとして参加しており、こういった木の操作時に何をどうすればよいかの体験があったことが、このスムーズな動きにつながっていると考えられる。

#### 4. 考察：玉切りにみる〈心体知〉

玉切りの手順は以下である。

1. 測定位置に尺棒をあてる。
2. 1人が測定発端位置、他の1人が測定終端位置へ移動する。

3. 山棟梁が木の種類を決定する。

4. 測定発端・終端位置の両方へ切断箇所と木の種類を記入する。

5. 次の測定位置へ移動しこれを繰り返す。

この知識が重々弁えられている 3.1 の模範例では、尺棒を操作する人 (郷愛副委員長)、測定発端・終端位置へ記入する人 (月光副委員長・寶友副委員長)、木の種類を決定する人 (山棟梁) という分業が時間的に並行して達成されている。すなわち、上述の玉切りとは何をするのかという〈知〉とそれを協働活動技法として実践する〈体〉が実現されている。またこの背後には以下の〈心〉が働いている。

- 山棟梁には知識を提供してもらうのであり、実質的な作業は三夜講が行う。
- 世話人が率先して作業を行うのであり、見習いは適宜作業内容を補助する。
- 効率的に作業を進める (もたもたしない)。

3.2 の初めての玉切りでは、山棟梁が尺棒を操作しているため、世話人の寶友副委員長が単なる記入の補助をしているようにみえてしまう (図 10 の場面 1)。また見習いの成翔副委員長も寶友副委員長の側へ移動するもののどう活動に参加してよいか分からず、側に立っているだけのことが多い (図 10 の場面 1、2)。本来であれば、寶友副委員長とは反対側の尺棒の端へ移

動し、いち早く切断位置や木の種類を記入すべきであるが、そうすべきであるという知識がないために、その作業を山棟梁にさせてしまっており、〈心〉の随所に違反している。また、寶友副委員長が作業を続行しているのに、自分だけ先に止めて引き返している箇所すらある（図10の場面3(49)）。

この時のビデオを翌年見た成翔副委員長は以下のようにならに話してくれた。

- 「なんて自分は態度が悪かったんだと思って」
- 「すげー恥ずかしい」「(煌心副委員長へ向かい) お前もビデオを見たらすげー恥ずかしくなるから」
- 「よくみんな怒らなかったなと思って」

これらはすべて精神面に対する言及である。怒られても仕方ない恥ずかしい態度をとっていたというのである。

これに気づいている二年目の玉切り(3.3)では、尺棒こそ山棟梁に操作させてしまっているものの、山棟梁が木を測定するのに出遅れることはない。また、初めてこの作業に参加した煌心副委員長も成翔副委員長と同程度の機敏な動きをみせており、山棟梁の尺棒操作まで手伝っている(図11の(11))。作業の主体はあくまで自分らであり、知識を提供してくれる山棟梁の補助を率先して行うという〈心〉が身につけているからこそ、ここで作業を補助するために手を出し協働で活動を行うという〈体〉も実践できているのであろう。

この煌心副委員長に着目すると、これまでに参加してきた社殿の造営やぼや出しといった活動を通じて、それらの活動を実行するための個別の〈知〉を得る過程で、世話人や保存会の人々が行う協働活動に自身がどのように携わっていけばよいかという〈体〉を獲得し、またその時に活動の主体はあくまで三夜講であるべきで保存会さんが効率的に気持ちよく作業を達成できるようにあらゆる手出しをするという〈心〉を身につけてきたに違いない。それが逆にこの日初めて参加した玉切りという活動に適用された結果、3.3でみたように、世話人の副委員長に遜色なくこの作業に従事できていると考えられる。

図12にこの〈心体知〉の獲得モデルを示す。〈知〉と〈体〉は相互に不可分であり、ある活動aを行う中でどちらも学習される。その背後には〈心〉があるが、これはいくつもの活動bを通じて〈知〉〈体〉を得る中で、意識的・無意識的に取得・強化されていくと考えられる。〈心〉が学習されたなら、それに基づく〈体〉が実践され、未経験の活動cをも作法通りに行えるようになることとみなすことができる。

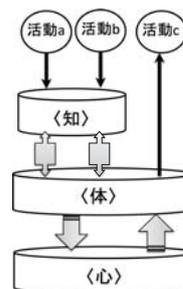


図12 〈心体知〉の獲得モデル

ある活動において誰が何を行うか予め決まっていなことがほとんどである。玉切りでも、尺棒を操作するのは世話人副委員長、と決まっているわけではない。山棟梁が操作したって良いのだと思う。今この作業を進行させるために必要な作業は何か、それをたくさんいるメンバーでどう分業していけばよいか、それを瞬時に察して各自が動くこと、この問題摘出能力や判断力、行動力がここで求められている〈心体知〉の1つの核心であると考えられる。この核心さえつかめれば、すべての作業に汎用可能になるのであろう。

やれ風呂掃除だ雪かきだ、火事だ、戦だ、遭難だと事あるごとに村人たちは駆けつけて対処してきたのだろう。手を携え合って助けあって生きてきた人々のそのやり方を「三夜講」は今に引き継ぐ教育システムとしてある。

謝辞 調査にご協力いただいている歴代の野澤組正・副惣代、顧問、保存会、三夜講の方々に感謝します。本研究は、科学研究費補助金基盤研究(B)「祭りの支度を通じた共同体〈心体知〉の集団学習メカニズムの解明」(2015~2017年度、代表：榎本美香、課題番号：15H02715)ならびに国立情報学研究所共同研究「非成文化圏コミュニティ文化の伝承を支える世代間協働インタラクションの理解」(2013~2014年度)、代表：榎本美香の補助を受けています。

## 参考文献

- [1] J. S. Brown, A. Collins & P. Duguid. (1989) Situated cognition and the culture of learning. *Educational Researcher*, 18, 32-42.
- [2] J. Lave & E. Wenger. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge University Press.
- [3] J. Lave. (1977) Tailor-made experiments and evaluating the intellectual consequences of apprenticeship training. *The Quarterly Newsletter of the Laboratory of Comparative Human Cognition*, 1, 1-3.
- [4] 生田 久美子. (1987) 「わざ」から知る. 東京大学出版会.
- [5] 大浦 容子. (1996) 熟達化. 波多野 諄余夫 (編), 認知心理学 5: 学習と発達. 11-36. 東京大学出版会.